様式第２号

視察研修先	千葉県君津市	氏名	阿部　清
視察研修項目	君津市商工・観光アクションプランについて		

所感

房総半島のほぼ中央に位置し、千葉県で２番目に広い面積を持つ緑豊かな街です。東京湾に面しており、大手鉄鋼メーカーの製鉄所が操業する県内屈指の工業都市で、製造品出荷額７，０００億円（県内４位）となっており、鉄鋼業が製造品出荷額の９割を占めるまちである。君津市には、６つの酒蔵があり、その１つの酒蔵が千葉県初の房総ウイスキーを２０１８年に製造免許を取得、製造販売している。華やかな甘い香りとまろやかな風味が特徴である。

人口７万９０００人・面積３１８．７８㎢　高齢化率３３．９％

○君津市商工・観光アクションプランについて

令和４年４月に策定された商工業・観光業に特化した計画である。

人口減少に歯止めをかけ、地域の産業である商工業・観光業を持続的に成長させるために作成している。コロナ禍で落ち込んだ市内経済の回復や脱炭素、DXといった新たな課題に対応し、商工会・観光協会と連携した施策を進めている。

商工業の振興、ウィズコロナ・ポストコロナに向けた事業者の経営支援やDXの推進等新たな需要開拓をサポートする必要性を感じている。

脱炭素社会の実現。東京湾沿いは、日本製鉄君津製鉄所を中心とする重工業地帯である。すべての産業でCO2の排出を抑制し、再生可能エネルギーの活用を進めていくためには、技術的イノベーションと大きな設備投資が必要となる。

特に、設備投資については、新しい生活様式に対応した事業活動をしていくため、より良い生産性を高めていけるようテレワークやWEB会議、キャッシュレス決済等など、進化していくデジタル化に対応していく必要性がある。

地域的課題は、若者の市外への流出や需給のミスマッチが続いており、市内の人手不足が悪化することが懸念されるため、地元出身者の雇用促進やマッチング・求人開拓等を進めるとともに、シニア層の労働参加や外国人労働者の受け入れなど、新たな施策にも取り組んでいく。

君津市は、東京アクアラインや圏央道などの道路網の発展による立地の良さから企業の打診は毎年数件あるが、紹介できる用地不足により断念するケースがある。ポテンシャルの高いエリアの規制緩和等による用地の確保に取り組むことが必要である。

君津市の産業を考えると、脱炭素対策は非常に難しい環境にあります。製鉄企業は今後の脱炭素の投資による電気炉への設備投資の負担を乗り越えることが存続の鍵と言われます。頑張って乗り越えていただきたいと願っている。寒河江市も、新しくウイスキー事業が進んでいる。いい方向に進んでいくことを願う。

様式第２号

視察研修先	千葉県南房総市	氏名	阿部　清
視察研修項目	道の駅を拠点とした観光振興について		

所感

概要　南房総市は、平成１８年３月２０日に、安房郡富浦町、富山町、三芳村、白浜町、千倉町、丸山町、和田町の６町１村が合併して誕生。千葉県の南部に位置し、関東最南端の観光都市でもある。三方を海に囲まれ、温暖で自然豊かで、漁業・農業が盛んであり、年間平均気温が１６度を超える、冬は暖かく夏は涼しい海洋性気候である。また、市内に８つの道の駅があり、市町村では日本一の数になる。人口は６月現在３２，９９１人、面積２２９．５５ｋ㎡、高齢化率は４７．８％と高い水準となっている町でもある。（道の駅とみうらは２０００年全国道の駅グランプリで最優秀賞を受賞した道の駅である。）

〇道の駅を拠点とした観光振興について

道の駅とみうら枇杷倶楽部において、研修を行う。

人口減少の影響により、地域の小さな商店が無くなっていく中、地元の住民が買い物のできる場所としての役割も担うため、農産物、水産物の販売はもとより、加工や商品開発などの６次産業から１次産業の下支えもしている。

自主財源、地方交付税、合併特例債などの補助金を活用した大規模改修を行う。過疎対策事業債を活用し、老朽化部分の改修やバリアフリー化、総合加工場の建設を行う。加工場は、まだ採算は取れていないが今後に期待したい。

道の駅の指定管理者の(株)ちば南房総は第３セクターであり、社長は市長が務めており、お互い忌憚のない意見を交わすことができ、観光協会の一員としても所属。行政と観光協会が一体となり「民営」の公設民営で運営している。

道の駅の雇用は、(株)ちば南房総の社員、準社員、パートタイム等は南房総市や近隣から採用。他の指定管理者が管理する道の駅でも、店舗スタッフとして地元採用している。

道の駅を核とした観光と農林水産業の一体的推進は、地域資源のびわを活かしたオリジナル商品の開発のため、総合加工施設をオープンし、お菓子製造、牛乳製造、びわ等加工室における商品開発事業による地場産品の６次産業化を目指している。観光地に隣接しており今後に期待したい。

８か所の道の駅の維持管理費、指定管理料の縮減は大きな課題である。第３セクターとして共同出資設立、運営しており、人材育成、商品開発、加工製品の販売拡大は喫緊の課題となる。

南房総市の道の駅を拠点とした観光振興を視察、６町１村の合併による新しい市である。合併により各地区にあった８つの道の駅を抱え込む大変さがあると感じてきた。南房総は観光地域でもあるが、道の駅の分散は大きいと感じてきた。しかし、

地域観光にはシンボルが必要となり、それなりの効果はあると思うが、維持管理の負担を考えると前向きに、今後に期待したい。

様式第２号

視察研修先	千葉県鋸南町	氏名	阿部　清
視察研修項目	都市交流施設・道の駅 保田小学校について		

所感

概要　千葉県南部・房総半島の東京湾側に位置し、温暖な気候と豊かな自然に恵まれた町です。聖武天皇が７０１年に日本寺の霊場で知られる標高３２９ｍの鋸山の南に位置することから鋸南町の由来がある。人口減少が続いており平成１２年に過疎地域自立促進特別措置法に基づく過疎地域に指定されている。令和２年人口減少率県内トップの１２．８％、高齢化率第２位の４８．１％となっている。町にとって最大の課題であるが、これまで築き上げた地域資源を活用し、町の賑わいの創出に取り組んでいる。令和８年７月で人口６，４６９人、高齢化率は２０２５年で５０％を超えている。

〇都市交流施設・道の駅保田小学校について

２０１４年３月に廃校になった保田小学校と隣にある保田幼稚園を、農林水産省交付金山村活性化プロジェクト交付金を活用、設計者の選定は、全国に公開プロポーザルを実施。全国から３７の公募があり、６社を２次選考、設計共同体（５大学連携、４事務所）を選定し、約１２億５，０００万円を掛けリノベーション、２０１５年１２月にオープンした。懐かしい雰囲気を楽しめる道の駅である。旧体育館の直売所、教室を活用した飲食店、宿泊施設（個室４人部屋×１０室)・大部屋（１５名程度×２部屋)、旧体育館をリノベーションし広いマルシェに鋸南町で採れた新鮮な野菜や花が並ぶ。

コロナの時期に係り、売り上げ落ちるものの順調に売り上げを伸ばし、年間１０億円の売り上げ、年間入り客数１６０万人となっている。研修時も木曜日にも関わらず多くの子供から大人までのお客でにぎわっており、駐車場２００台スペースが満杯の状況にあった。

学校ストーリーは、８時４５分にラジオ体操、９時校歌斉唱、昼食は給食をイメージしたメニューを提供、地元の海鮮やアジフライが味わえる。５時にチャイムを鳴らし閉館となる。

宿泊は、教室を宿泊施設に変え、部屋に黒板やいす机を残し、ユニークで昔懐かしい宿泊ができ、お風呂も準備しており、外から見ると大きく『お湯』と壁に書いてあるが、テレビの放映が大きく反映している。

同じく、幼稚園も教室を遊び場や、売店、食堂として開店している。木曜日にも関わらず多くの子供たちで賑わっている。子供の遊び場所の横は親が休める喫茶ルームとなっており、子どもを遊ばせながら親の休み場所にもなっている。

本市でも、人口減少による学校編成が進んでいる中、中学校統合による新校舎の建設が進んでいく。また、小学校も順次進んでいくものと思う。その中で、活用で

きる小学校の検討をしていく必要性も感じる。その成功例があることは大きい。学校も壊すだけでなく地域貢献できる利活用をし市政に反映することも必要と感じる。

様式第２号

視察研修先	千葉県市原市	氏名	阿部　清
視察研修項目	リノベーションまちづくりについて		

所感

概要　千葉県の中央部に位置し、１番広い市域を有し、東京湾岸には、日本有数の石油コンビナートが広がり、製造品出荷額は全国トップクラスを誇り、南部には養老渓谷などの豊かな里山が残る多彩な魅力を持っている。市内には３２のゴルフ場があり、数では日本一で「ゴルフ場銀座」といわれている。７月現在人口２６４，３４９人・面積３６８㎢・都心から５０㎞圏内で、財政力指数の高いまちである。

○リノベーションまちづくりについて

地域の人や空き店舗などの今ある資源を活用し、新たに起業したい人を支援し、地域の価値を高め、若者が集うまちづくりを目指し、令和２年から市、商工会議所、町会長連合会が連携する実行委員会を中心に取り組んでいる。

その結果、公園や商店街、古民家など多様な交流や挑戦が広がり、「理想的な暮らしをつくる」が着実に形になっている。

いちはらリノベーションまちづくり行政施策と民間活動をつなぎ、地域の自走力を高めるまちづくりである。

いちはらリノベーションまちづくり塾は、実在する空き物件を題材にした実践的プログラムになっている。事前準備から始まり、チームでのビジネスプラン作成、公開プレゼンとアフターフォローの流れとなり、プランの事業化へと進んでいく。五井朝市は、五井駅の賑わい創出を目指し、塾から誕生した例である。毎月第３日曜日に開催され地域住民や出展者の交流場所になっている。今は、隣駅の姉ヶ崎駅周辺エリア、八幡原駅周辺エリアでも稼働中、最終的には、オール市原を目指している。

マネジメント組織は市のパートナー的存在、市や民間では難しい地域の調整を行うほか、都市再生整備計画などの案を市に提案することができる組織との連携による組織の強化を図っている。

地域づくりに取り組もうとする民間事業者（市職員も含む）のスキルアップを含めた都市経営勉強会を立ち上げ、月１の「いちはら会議」を開催、市内で活躍するプレイヤーにスポットを当て講演、終了後交流会を開催する。プレイヤーが交流することで、新しい事業創出になることを期待している。会議には多くの参加がある。

ハード中心のまちづくりではなく、人材育成やコミュニティ形成と組み合わせて進めることで持続的なエリア価値向上につなげることを目指している。

本市においても、若者の起業者育成事業が進められているが、多くの若者を巻き込める体制づくりがほしい。誰もが参加し、夢を実現できるような仲間づくりの場づくりが必要である。